

監修委員 井上靖 石森延男 更科源藏

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第四卷

北海道児童文学全集





北海道児童文学全集

第四卷

立風書房



北海道児童文学全集 第4巻

21cm



昭和五十八年九月一日初版第一刷発行

著者代表―和田義雄

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三十一六一八

電話東京四四七一一一九一 振替東京五―七四四九三

本文―信毎書籍印刷株式会社

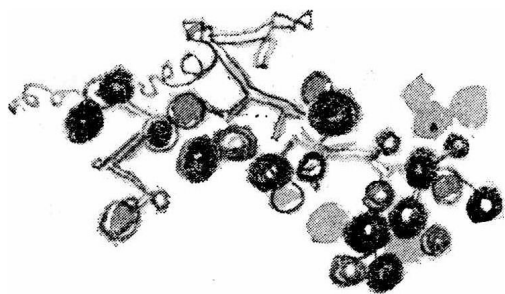
製本所―株式会社難波製本

表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

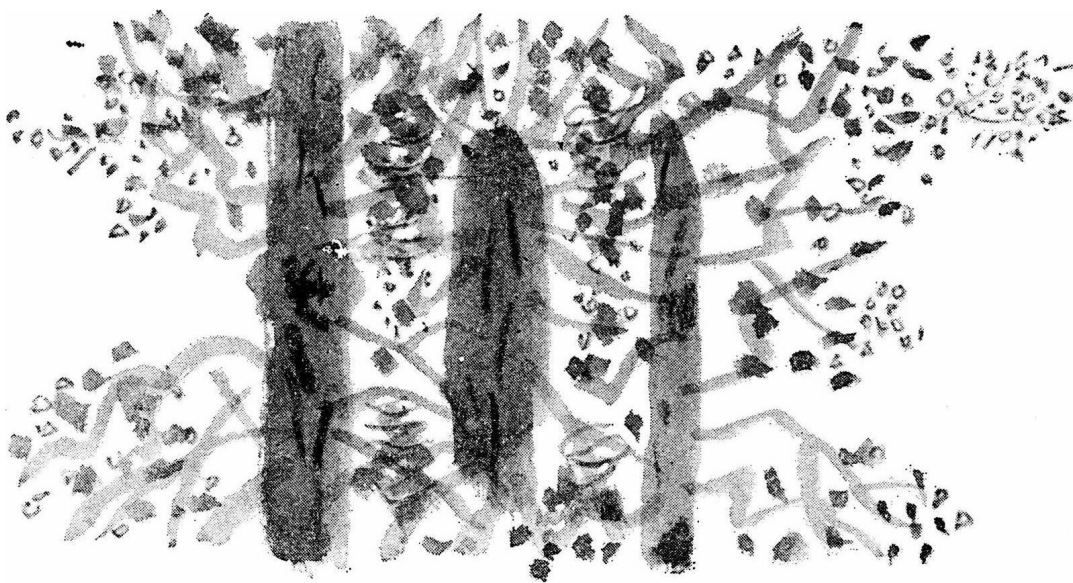
製版―江戸製版印刷

定価一、八〇〇円

8393—50174—8909



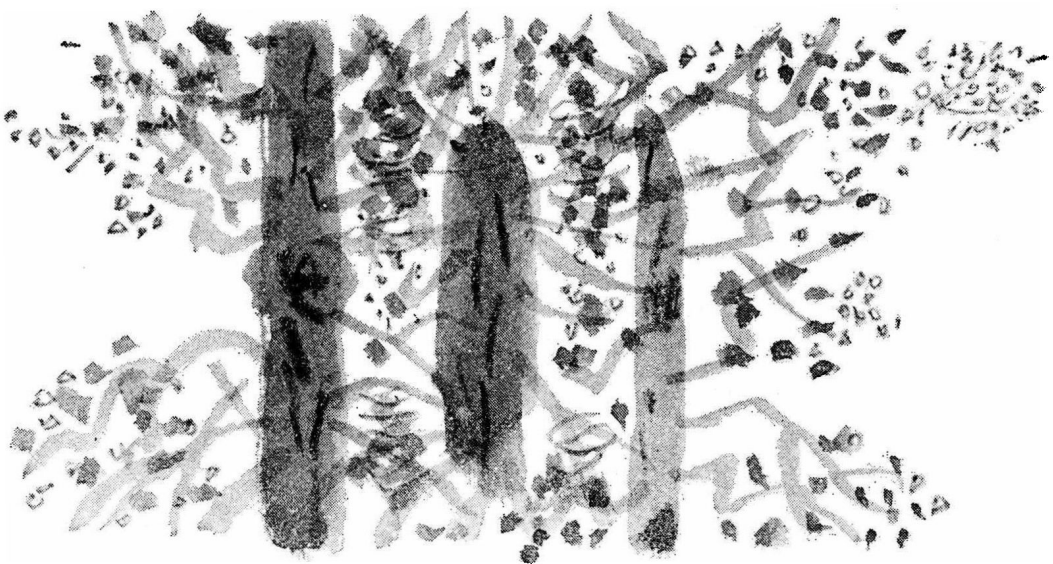
北海道児童文学全集
第四卷 目次

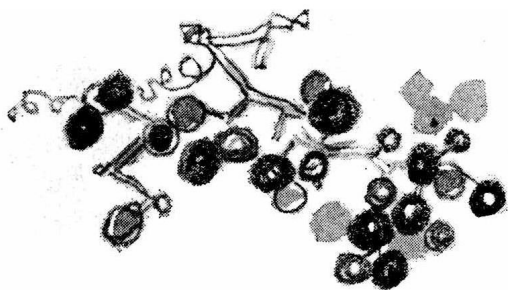




雪のはとば
 トラツクまつり
 蛇にかまれたお父さん
 この花の名は
 カラスの森の町長さん
 たろのえりまぎ
 三角山のユキオトコ
 カー助かえってこい
 ぼくのくろう
 キムンカムイの祈り
 オンネ先生ばんざい

笠原 肇 147	佐藤 将寛 135	畑 正憲 121	井上 二美 113	前川 康男 73	きたむらえり 57	長野 京子 45	和田 義雄 33	武田 亜公 27	川崎 大治 17	石森 延男 5
----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------	---------





あばしりはふゆ
 ユキはひとりぼっち
 ハナとひげじい
 コロボックルは
 もういない
 くさいろのマフラ
 ー
 オオカミのはんたい
 天にのぼったチプ
 ともだちみつけた
 ミコちゃん泣いた
 海を知ってるかい

前田
 祐子
 359

川村
 主税
 335

加藤
 多一
 319

四辻
 一朗
 301

大沢
 陽子
 281

後藤
 竜二
 271

今井
 鴻象
 263

三上
 敏夫
 249

高橋
 和子
 211

とがしとしこ
 179



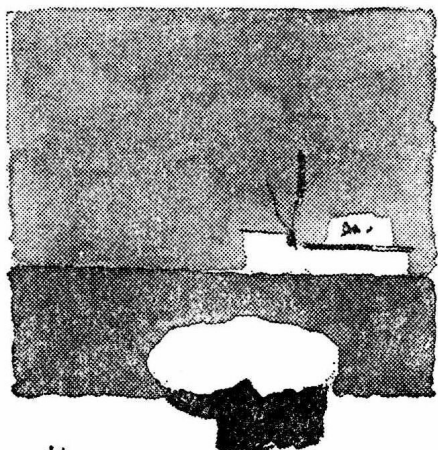


そおっと、そおっと、
 おしえてあげる
 コロタンのハサミ
 ばあんざあい
 うまごや ブヒヒ
 おかあさん カバに
 なつちやつた
 やさしさ色の風
 ぼくのおぼけ

解説

- | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| さいぐさきえ | 363 | 後藤美奈子 | 367 | 荻窪由美子 | 375 | 藤原 章子 | 379 | 小川 直美 | 383 | 妹尾和香子 | 387 | 西田 良子 | 391 |
| 大本 七重 | 371 | | | | | | | | | | | | |





41

雪ゆき
のはとば

石森いしもり
延男のぶお

「晴れないかな。」

だれかが、ひとりごとのようにいいましたが、だれもへんじをしようとはしません。

雪は、ひっきりなしにふりつづいてるので、子どもたちは、つんである材木のかげにうずくまり、おたがいからだをすりよせて、ひとかたまりになっています。

月がないので、どこもまっ暗ですが、それでも雪明かりがして、そのへんが、ぼうっと明るい。

「風がでなけりゃいいな。」

その子がまたいいました。

ほかの子は、やはりだまっています。

はとばにうちよせる波の音が、いつもよりはしずかで、港のともしびが、ついたりきえたりしています。

「おい、そんなにしておくんよ。」

「だって、寒いんだもん。」

「おい、おすなったら。」

子どもたちのひとかたまりは、だんだん横だおしにかたむいていって、とうとうごろっところげてしまい、七人は、みんな地べたにつもった雪の上に手をつっこみました。

「せっかくぬくもってきたのにな。」

子どもたちは、ふところ手をしたり、口もとに両手をあてて息をふきかけたりして、ひえた手をいたわりました。

「もう、船がでるころだろ？」

「あ、そうだな。」

汽笛がボーと長くひびきます。

「いま、でるんだな。」

船といっているのは、客船ともはしけともつかない小さな船で、いまごろになると、まいばんこうして港をでてゆくおわりの定期船です。

子どもたちは、この船の出を、いつも心待ちに待っているのです。

というのは、ちょうどこの時刻になると、子どもたちのいちばんすきな「おばさん」が、どこからともなくやってきてくれるからです。

七人の子どもたちは、戦災で、みなし子になり、たよるところもなく、家もなくて、こうしてのライヌのようにさまよっているのです。

昼のうちは、このはとばで、思い思いにはたらいています。船からおりてくる船客の荷物をはこんでやったり、荷車のあとおしをしたり、はしけのつなをひろってやったり、落ちこぼれたマメや米をはき集めたりして、いくらかのお金をもらい、それでめいめいが食べものを買いしました。買えないものには、わけてやりしました。

昼は日のあたるところで休むこともできますが、夜になるとどうにもなりません。このようにつまあげた材木のかげに集まってきては、一夜をどうにかあかすのでした。

ちょうどこのおわりの定期船^{ていきせん}がでるころになると、いちばん小さな「おばさん」がやってきては、子どもたちの頭をやさしくなでてくれます。それだけで七人の子どもたちは、みんな気持ちがあたたかくなるのです。

ときには、いりマメを持ってきてくれたり、ときにはあったかいタイのどらやきをみんなの手にわけてくれたりしました。

七人の子どもらが、この「おばさん」をとりまいて食べてしまうと、おばさんは、またどこかへいってしまふのです。

ひょいとふいてきては、七人の子どものまわりを二、三どまわって、またどこへともなくいってしまふつむじ風のような「おばさん」。

子どもたちは、「おばさん」を、めいめい自分だけのおかあさんのように思っています。だから「おばさん」がくると、みんなきそってその手をうばおうとし、まっさきに話しかけようとするのです。

「おばさん」は、わらいながら、どの子にもかわりなく同じようにことばをかけ、頭をなで、いたわってくれました。

どうかすると、いちばん小さい子をひざにのせながら、お話をしてくれることもありました。

「きょうは、なんにもないのよ。ひとりずつだいてあげようかな。」

子どもたちは、「おばさん」の顔を見ただけで、ちょっとそばにいるだけで、それでももう満足^{まんぞく}なのです。

「せいの順^{じゆん}にならんでごらん。」

七人の子どもをならばせておいて、小さな子からつぎつぎだきあげてやりました。

「なにかうたってあげようかな。」

「おばさん」の声は小さいが、きれいないい声でした。波の音によくあうようなおちついた声でした。

歌を聞きながら、ゆめごこちになり、寒さも、ひもじいこともわすれて、うとうととねむりこける子もありました。

「おばさん」は、そつとむしろの上に、そんな子をねせつけておいて、たちさつていくこともたびたびでした。

「おそいな、おばさん。」

「どうしたんだろう。」

「雪がふるから、こないのかな。」

「どんなにふったつてくるよ。こんなに待ってるんだもん。」

「おまえ、道路どろのほうへいつて、ちょっと見てこいよ。」

大きい子が、こういうと、ひとりの子がすたすたと雪の中を歩いていきました。

「それでもだんだんこぶりになったな。」

「あ、雲がきてきた。」

「風になるんかな。」

「こまるぞ、ふぶきじゃ。」

「くつつけよ、もつと、おれたちにくつつけよ。」

子ズメのように、子どもらはひとしきりくつつきあいました。

道路まで見にでかけていった子が、気ぬけしたようにもどってきます。

「見えんか、おばさん。」

「見えん。」

「ほんとか。」

「うん。」

「足あともなかったか。」

「うん。」

雲がきれて、思いがけないところに月ができました。氷こおりのようにさえた月の光で、あたりは青白くかがやき、目の前の海だけが、なまりをけずったように青黒く光りだしました。

「おれ、もういっぺん見てくる。」

びっこをひく子が、雪の中をかけたすようにでていきました。まもなく、倉庫くらぐらの暗いかげにかくれて見えなくなったので、みんなは、ぼんやり空をながめていました。

しばらくして、倉庫くらぐらのかべつたいにかけてある鉄てつのはしごを、のぼっていく人かげが見え、それが二階かひのベランダにしょんぼりと立ちました。月の光をあびて、黒いはりこのように見えます。黒いはりこは両手をあげたので、

「きたのかな。」

と、子どもたちは、みんなそう思いました。

「そうかもしれん。」

「うれしがつてるのかな。あいつ、手をあげて。」

「いや、ちがう。」

「だって、まだ手をあげてるもん。」

「寒がっているんだ。」

大きい子が、指を口にあてて、ピュッと口ぶえをなりました。口ぶえは、しずかな荷あげ場かあげばに、ピューンピ

ユーンとさびしくこだましました。黒いはりこは、またはしごを一段一段おりてきて、倉庫のかげからもどつてきました。

だれも「おばさん」のことを聞きませんでした。

「風がふかなけりゃいいな。」

だまっているのがつらくて、だれかがこんなことをいいます。

「おばさん」は、とうとうその夜はきてくれませんでした。

よく朝は、さいわいなお天気になりました。風はちつともふかないので、雪はやわらかくつもったままでした。

「おれ、おばさんがよ、船に乗っていったゆめをみたよ。」

と、いちばん小さい子が、目をしょぼしょぼさせていました。

「どこへいったんだ。」

「わからん。」

「どんな船だった。」

「わからん。」

「船に乗ったっていったじゃないか。」

「海の上をいったんだから、船にちがいないよ。」

「ゆめでよかった。」

「今夜はくるよ、きっと。」

みんなは、朝の仕事を始めるので、倉庫門番のおじさんのところにいき、そこからまた、仕事を見つけにみんなばらばらになりました。

日がくると、子どもたちはつかれきって、ひとりひとり材木をつんだところに集まってきました。

ひとかたまりになると、ちんばの子が、

「さかなの目は、夜光るんか。」

とへんなことをいいます。すると大きな子が、

「なんで光るもんか。」

と、はきだすようにいいました。

「いや、光る。」

その夜は、子どもたちは、さかなの目のことで話がはずみました。

水の中でも目をあけておられるさかなは、つごうがいいとか、夜は、水の中はいつそう暗いから、光らなければ見えないだろうとか、光らなかつたら、泳ぐときにぶつかってしゅうがあるまいとか。いっそのこと、自分たちもさかなに生まれてくればよかったなどといあいしました。

「でもよ、さかなだつたら、おばさんに会えんぞ。」

いちばん小さな子がこういうと、みんなはそうだというような顔をして、だまってしまいました。

「おばさん」ということがでると、みんなは、もうたまらなくなり、もし今夜きたらまっさきにとびついていて、しっかりとだかれるんだと、めいめいが思っています。

赤っぽい月が、のぼりかけ、夜がふけると空の色は、深いあい色になりました。おそくまでさかなの目の話からかってなことを語りあいました。それでも「おばさん」はきません。今夜もあきらめてねむろうとしていると、

こちらへやってくる黒い人かげが見えます。

「おばさんだぞ。」

「おばさんだ。」

子どもたちは、スズメがとびたつようにかけだして行って、そのまわりをとりまきました。けれども、それは「おばさん」ではありませんでした。年とった郵便屋さんでした。

「おまえたちか、『はとばの子ども』たちというのは。」

「そうだよ。」

「あちこち、うんとさがしたよ。」

「どうして——」

「どうしてって、番地ばんちも書いてないし、あてなも書いてない手紙だもんな。だからずいぶんさがしたんだ。さ、おまえたちへ手紙がきてるよ。昼はこれなかったから、こんな夜になってしまったが——」

「手紙？」

「どこからきたの？」

「それにいそぎの手紙となっているからな、ほら速達そくたつだろ。でもよかった、見つかったな。」

そういつて、小さいふうとうをとりだしました。子どもたちは、一通の手紙をまんなかに、頭を集めました。郵便屋ゆうびんやさんが、かいちゆう電燈でんとうをあてると、黄色っぽい光が、手紙をまるくてらしました。

「おじさん、読んでおくれよ。」

「おまえたち、読めんのか。」

「字なんて、わからんよ。学校なんて、いつてないもん。」

「ようし、どれ、読んでやっか。」

郵便屋^{ゆうびんや}さんは、顔を近づけて読みあげました。

「みなとの子どもたち、みなさんへ。」

わたくしは、こんばんの船で、ほら、いつもみんなと会うときに、港^{みなと}をでていく小さな定期船^{ていきせん}があるでしょう、あれで、ここをたつていくことになりました。

わたしも、まいばんのように、みんなと会うことがどんなにうれしかったかしれません。でもこんばんからは、もう会えなくなります。いちばん小さい人を、みんなでかわいがるのですよ。そうして、みんなでかたまつて、なかよくするのですよ。

いまの日本には、みなさんのように、親のない子どもたちがどれほどいるかわかりません。友だちもなく、ひとりであらうろしている子どももたくさんいるのです。

けれどもあなたたちは七人、かたまっていたわりあつています。そのあたたかさをたいせつにしてね。日本だって、いつまでもいまのようなあわれな日ばかりつづくとは思いません。

おばさんは、もういちど、みんなのところへもどってきたいと思っています。

きつともどってきますよ。それまでなかよく元気でね。

さよなら。」

読みおわったとき、港から汽笛^{きふく}が聞こえてきました。

七人の子どもたちは、そっと顔を見あわせます。